

AR CA DIA

49
SUMMER 2011

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



MI
OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

私が岡崎市美術博物館ににわかリクルートされて、館長となったのは平成十年（一九九八）の初夏の頃だった。あれから実に十三年と数ヶ月、ずいぶん長い間お世話になったものだ。ふり返つてみてわれながら驚き、代々の館員諸氏の御厚誼と市民の皆様の御支援を思いおこして、心底から感謝の念が湧いてくる。

平成八年、九年の開館当時のいくつかの展覧会の後に、私をはじめ直接にかかわった企画は、平成十年六月からの「河鍋晩齋展」だった。そのときの図録にはもう「画鬼晩齋の想像力」という論文を書いている。その後の展覧会も、つい今春の「桃源万歳！」展にいたるまで、毎回のポスターやチラシを収めたアルバムを操ってみると、それぞれに意外なほどに思い出深く、会場の雰囲気や来館者の多寡までが記憶によみがえってくる。

「元祿繚乱」「矢作川」「京都画壇の俊英たち」「ベルギーの巨匠五人」「マックス・エルンスト」「カラヴァッジョ」「遙かなるイスタンブール 大トルコ展」等々、毎回実にいい勉強になった。「冷泉為恭―幕末やまと絵夢花火」（平成13年）は、企画協力の小林忠氏、榊原悟氏のお二人と夏の乙川畔で大花火を見あげながら思いついたいい題名だった（その榊原氏が私の後任を引きうけて下さったわけだ）。「徳川將軍家」展（平成15）では徳川宗家の徳川恒孝氏御夫妻はじめのお目にかかり、「徳川四天王」展（平成18）には酒井、本多、井伊、榊原の四家の当代御当主が揃い踏みして下さって、これも壮観だった。「現代の日本画―その冒険者たち」展（平成15）では、土屋禮一、間島秀徳、岡村桂三郎、菅原健彦、浅見貴子、山本直彰、会田誠氏ら、実に愉快な元氣いっぱいの前衛作家たちと知りあいになり、その何人かとは一緒に民宿の湯にも入った。

「平賀源内」展（平成16）で企画の当初からお世話になった東京新聞の垣尾良平氏。「《森》としての絵画」展（平成19）で題名をめぐって言い争いをした同展監修、現豊田市美術館学芸チーフの天野一夫氏。「茶の藝術」展（平成19）で友情とともに才気煥発ぶりを発揮してくれた大和文華館の中部義隆氏。「茶の

MESSAGE

湯の文明開化―玄々齋生誕二百年記念展（平成22）で岡崎の安宿に幾晩も泊まりこみで周到な配慮をみせてくれた裏千家茶道資料館の橋倫子さん、そして彼女が「雲の上の人」と呼んでいた大宗匠千玄室氏やお家元千宗室氏。そういえば「興福寺国宝展」（平成17）の初日に国宝弥勒菩薩の前で荘厳な開眼法要をなさった同寺貫主多川俊映氏。また「菅原健彦」展（平成21）で会期中何回も献身的なワークシヨップを催して観客を沸かせてくれた菅原健彦氏と、いつもすてきなお菓子をおみやげに下さった菅原夫人。そして「額田―その歴史と文化」展（平成18）で、額田の古い社寺の写真や四季の祭りの映像を、いかにもなつかしげに眺めて語りあっていた額田出身らしい年配の男女のお客さんたち……

みんなみんな、この十三余年の間に岡崎市美博でめぐりあった人々、さらにも親しくなった方々で、その面影とともに忘れ難い人々だ。館内では、私の着任当初からの同僚荒井信貴、堀江登志実両氏や杉山明美さんはいうまでもなく、現在の近藤行宏氏にいたるまでの代々の管理班長にも、私のわがままを許して頂いて大変なお世話になった。学芸員の村松和明氏や千葉真智子さんには、彼らが図録や紀要や「アルカディア」に文章を書くたびに、その語法の小難しさを訂正して平明にするという館長としてのよろこびを与えて貰った。千葉さんにはとくに私の最後の企画展「桃源万歳！」（平成23）で、最初から最後までその多能ぶりによつて献身してくれたことに、重ねて深く感謝する。

岡崎市美術博物館は、本年度からの組織変えによつて、子ども美博や美術館を傘下に収め一体となつて、三河の文化創造・文化発信の最大拠点として活動を拡大することになった。新館長榊原氏の指導のもとに、全日本と世界を眺望しながら館の名をさらにも高からしめんことをこそ願う。そしてなるべく早くこの館を岡崎城近辺か「りぶら」の近くに統合移転させて、市民のアクセスの便をよくすることを、市長および市議会にお願いしておこう。

長い間おつきあいを賜り、有難うございました。再見！

白鳥のごとく——着任の辞——

館長 榊原 悟

この七月一日、本館館長に任じられ、着任しました。これから始まる、この見晴らしの佳い美しい美術博物館での仕事に、大いに期待しているところです。なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

すでにわたしの名字「榊原」からお察しの方も少なくないと思いますが、三河は、わたしの故郷です。その故郷の博物館として、本館へは帰省の時など、折にふれ時間をみつけては訪れてきました。開館以来、地方都市に在る博物館の中では珍しく、野心的な内容の展覧会がしばしば開かれていたからです。いや、訪れたのは、一観客としてだけではありません。本館で開催された「元祿繚乱展」(平成十一年)や「冷泉為恭展—幕末やまと絵夢花火」(平成十三年)では、展覧会の裏方の一人として展示作業など微力ながらお手伝いもしました。しかも後者の際には、展覧会に関連する催しとして企画された講演会でお話しもしました。当日はほぼ満員の盛況で、岡崎市民の美術愛好熱の高さをまざまざと実感できたのも、現在ではよい思い出です。また、そうした折に目にした、本館スタッフのてきぱきした仕事振りも忘れることはありません。

一体、展覧会というものは、一度でもそれに係わってみれば、即座に納得して貰えるのですが、開催に至るまで実に多くの仕事—その多くは雑用と言ってよいでしょう—があるものです。しかし、わたしたちが展覧会に行つて目にするのは、塵ひとつ落ちていない会場に美しく、しかも掛け替えのない作品が整然と、一分の狂い無く並べられている状態です。そのためつい忘れてしまうのが、そこに至るまで、どれだけの作業と苦勞があったことか、という点です。細心の注意と共に、多くの汗が流されていたはず。そのことに思いを致して貰えれば、美術館の、特に展覧会活動への理解は、さらに深まるのではないのでしょうか。わたしは、そうした美術館での仕事と苦勞とを学生たちに説明するのに、よく湖に遊ぶ白鳥の姿に譬えます。一見、優雅に見える白鳥ですが、水面

MESSAGE

下では、必死に水掻きを動かししている。その必死の水掻きこそが、美術館の仕事(活動)である、と。これが、21年間、サントリー美術館で学芸員として50回以上の展覧会を企画構成した、わたしの思いです。

本館のスタッフは、学芸、普及、管理の別なく、そうした白鳥の水掻きの仕事を、実に優雅に軽やかに片付けていました。このスタッフとこれから力を合わせていけば、さらに充実した、魅力的な展覧会が実現できるのでは、そんな期待でいっぱいです。

美術館、博物館をとりまく環境は、年々、厳しさを増しています。本館ともその例外ではないでしょう。しかし、厳しいからこそ、さらに日常の地道な研究に裏打ちされた、内容の濃い展覧会を企画し、それを広く館外に発信することが必要でしょう。そうすることで初めて岡崎市の美術・歴史愛好家はもとより、県内外の方がたの期待に応えてゆけるのではないのでしょうか。幸い本館には前館長芳賀徹先生のご指導によって培われた美術博物館力があります。これを継承し、磨きをかければ、国内でも独自の個性ある博物館になるでしょうし、そうなるべく努力する決意です。市民の皆さまの一層の熱きご支援をお願い申し上げます。





日の丸腹巻き 昭和12年頃

この展覧会では、約四百点にわたる昭和の戦争に関連した資料を紹介しています。長年にわたり市民の方々から岡崎市に寄贈いただいた資料の中より、昭和初めから二十年（一九四五）の終戦頃までの戦争に関わる資料をいろいろと選び、大きく二つのコーナーに分けて展示してみました。

「戦時下の昭和」では、額田郡公会堂での徴兵検査に関する文書と写真にはじまり、充員召集令状を交付した際の記録類、召集によりあるいは職業軍人として戦地に赴いた人の陸・海軍の軍服をはじめとする軍装品、勲章や従軍記章、南方の島に赴任した従軍看護婦の所持品などを展示しています。そし

て、「戦時下のくらし」として、無事を祈って結んだ千人針、出征兵士を見送った日の丸の手旗、戦線に送った慰問絵葉書や我が子の成長を知らせる手紙、戦地での慰霊祭でしたためられた弔辞、軍事教練に用いた木銃、敵機襲来に備えることを呼びかけた防空や灯火管制のチラシ、また、岡崎空襲時に投下された焼夷弾、終戦後に復員した際の引揚証明書などを紹介しています。

これら資料には、ボロボロになつている、汚れている資料があります。これは使用した本人自身が、あるいはその家族、縁者の人たちが、戦後かなりの歳月が経つても捨ててしまうことができず、手元に置いていたものです。あるいは、とても七十年近く前のものとは思えないほど、きれいな状態な資料もあります。とくに軍服などに言えることなのですが、資料として受け取りに何うまで、毎年夏になると虫干しをし、防虫剤を入れ替え、大切に手入れされ続けて保管されていたものだからなのです。どのような状態であろうと、戦地に行った人たち、戦時下を生き抜いた人たちにとっては、時代を生き抜いてきた各人の歴史の品々であるのです。

日本の国に兵役の義務が課せられて

EXHIBITION

いた時代が続いていたことを知らない、岡崎の町に空襲があったことを知らない、そんな世代が多くなつてしまいました。それは、昭和の時代は遠くなり、平成も二十余年を迎えたという、戦後六十六年という歳月の現実と言えましょう。博物館が資料として寄贈していただくものには、それぞれに所有者の想いも付いてきます。ことに戦争に関するものについては、深く重いものがあります。それを受け止める術を持たない戦争を知らない世代にとつて、時には繰り返すように響き、時にはその重さに立ちずくんでしまうことさえあります。戦争を体験した世代が共通にもつている心情を、今にしても癒えることのない、戦争への想いを垣間見る心地がするのです。

戦争だけは二度と起こしてはならない、戦争体験者が皆さん、口にする言葉です。こうした人たちが抱き続けている戦争の記憶を、寄贈いただいた資料とともに後世に伝えていかねばならないと考えます。遠い記憶になつたといわれる戦争の時代。しかし、体験者がいる身近な歴史について、展示品を通じて、それぞれの立場で感じとつていただき、戦時下と「今」の時代について考えていただければと思います。

収蔵品展

くらしと戦争

— 昭和 戦争の記録 —

伊藤久美子

会期：平成23年6月4日（土）～7月31日（日）

収蔵品展

名品コレクション100選

—ピカソから村上隆まで—

稲垣満春

岡崎市には、岡崎市美術館、おかげき世界子ども美術博物館、岡崎市美術博物館の個性あふれる三つの美術館があり、それぞれが収集方針に基づき、購入、寄贈、寄託の方法により作品の収集を行っています。今回の展覧会では、三館のコレクションから百点を選び、三部構成で展示いたします。

昭和四十七年愛知県美術館に次ぐ県下二番目の美術館として岡崎市美術館が開館し、岡崎のコレクション収集の第一歩を踏み出しました。美術館と云えば郷土美術。四〇年にわたり地道に収集されてきた作品から今回は、岡崎生まれで創作版画の創始者として知られる山本鼎、その従兄弟にあたり天折の詩人画家として知られる村山槐多、二科会の重鎮としてこの地方の洋画壇に大きな影響を与えた北川民次、工芸の近代化をすすめる晩年を岡崎で過ごした藤井達吉、川合玉堂に師事し岡崎の日本画壇の礎を築いた平岩三陽をはじめとして、日本の近代美術史に名を刻む郷土作家の作品三〇点を厳選し展示します。

昭和五〇年代に入り全国の自治体にも次々に美術館が建設されていくなか、昭和六〇年には世界で初めての子

EXHIBITION

どものための美術館として、おかげき世界子ども美術博物館が開館しました。このコレクションの目玉は何といっても、世界の有名美術家たちが二〇代の頃に描いた作品の数々です。会場には、ピカソ十四歳の作品「男性頭部石膏像のデッサン」(写真)や、ムンク十八歳の幻の作品「雪景色の中の少年」、岸田劉生十六歳の作品「秋」など、教科書でもお馴染みの巨匠たちの二〇代の作品四〇点がずらりと並びます。

時代も昭和から平成へと移り、またバブル崩壊に伴う景気低迷により、「物」から「心」の豊かさが求められるようになり、平成八年には世界で初めての「心」をテーマにした新しいミュージアムとして岡崎市美術博物館が開館しました。館の愛称にもなっている「マインドスケープ(心象風景)」をコンセプトとして収集された「ダダ・シュルレアリスム」の作品群は、全国の美術館からの借用依頼も多く、国内屈指のコレクションとなつていきます。その中からデュシャン、エルン

スト、マグリット、ダリらシュルレアリスムを代表する作家を中心に、近年収集に力を入れている現代作家のものも含め三〇点の作品を展示いたします。美術館から始まった岡崎のコレクションは、美術博物館の開館によりさらなる広がりをみせています。

三館のメインコレクションが、ここ美術博物館に一堂に展示されるのは今回がはじめてとなります。市民共有の財産である本市のコレクションの数々を通して、三館の作品収集の成果と歩みをご覧いただくとともに、あわせて本市の美術コレクションの魅力をお楽しみいただければと思います。

三館のメインコレクションが、ここ美術博物館に一堂に展示されるのは今回がはじめてとなります。市民共有の財産である本市のコレクションの数々を通して、三館の作品収集の成果と歩みをご覧いただくとともに、あわせて本市の美術コレクションの魅力をお楽しみいただければと思います。



パブロ・ピカソ《男性頭部石膏像のデッサン》1895年

会期：平成23年8月6日(土)～9月25日(日)

桃源郷追憶

およそ三年の準備期間を経て、芳賀徹前館長の肝煎りで開催に至った「桃源万歳——東アジア理想郷の系譜」展も、始まれば、当然のことながら、終わりが訪れる。今では、桃源図に囲まれた展覧会会場は、二度と辿り着けず、しかし、それは確かにあったのだという記憶によってのみ繋ぎ止められている「桃源郷」の世界さながらに感じられる。そして、開催までの道のりも、大変だったような気はするものの、それは、何か不思議な、得がたい経験の塊として、懐かしく思い起こされるのみである。

中国美術や近世絵画は、二通り書籍を読んだところで専門外のこと。作品の調査や借用にあたっては、小川裕充先生や河野元昭先生、今はクリーブランドで学芸員をされている宣承慧さんなど、沢山の方にご教示をいただき、各美術館や所蔵家の方にも多くのご協力をいただいた。日頃、接する機会のない方々が殆どで、非常に有難いことであった。近代以降の作品の調査や研究についても同様である。そして、どうしても現代までを射程に入りたいとの思いからギリギリのタイミングで依頼をし、あまり

長くない制作期間の中で、六名の作家さんに作品を提供してもらえたこと、そして色々な話ができたことも、本当に有難かった。

加えて、海外からの作品借用。当館が単独で海外から作品を借用するのは、初めてのことで、相手先の美術館レジストラやキュレーターとの交渉や情報交換は新鮮だった。三月十二日のあの震災と原発・停電問題で、一時は作品の借用も危ぶまれたが、最終的には、成田着を中部国際空港着に変更することで貸し出しを了承してくれ、クリーエとして訪れたケイトさんの笑顔を見たときはとても安心した。ネルソン・アトキンス美術館のジュリーさんは、震災後、日本人皆に対する心からのお悔やみのメールをくれ、そこには、彼女が美術館の仲間と連携して義援金を募ろうと動き出していることが書かれてあった。遠い日本のことを思い、即座にそのような行動に出てくれる人がいたことに救われる思いがし、一方、震災で大変な状況の中、それでも当館への作品の貸し出しを気にかけて、様々に協力してくださった東北地方の美術館・所蔵者の方に深く感謝した。

また裏方仕事で、徹夜の勢いで図録の制作を担当してくれた印刷会社の方や、震災後の大変な状況のなかで、作品の輸送に融通を利かせ、一緒に動いてくれた美術品専門スタッフには、思わず同志という連帯感を抱いてしまった。

書き始めると、ぼんやりとした記憶の塊から、様々なことが浮かんでくるが、出てくるのは、不思議と良かったことや、良くしてくれた人たちのことばかりである。少し感傷的な文章になってしまったが、それだけ、この展覧会に思い入れがあったということなのだろうか。あるいは、当館に入ってから七年以上にわたる芳賀館長との思い出が、桃源郷のなかに置き残されてしまうような気がするからかも知れない。(千葉)

「桃源万歳！」展が閉幕した。それまでの慌しい空気は消えてしまい、なんだか祭りが終わったあとのような寂しさや漂っている。芳賀館長念願の、そして最後の展覧会ということもあって余計にそう感じるのかもしれない。

本展の広報・宣伝をこれまでにない

方法でできないかと模索していた日々も振り返ってみれば懐かしく、繰り返し話し合い考えたアイデアを、もう少し実行に移せたのではないかと、いう反省もある。実現した案は多くないが、市図書館との連携や、先行ちらしの配布にアニメーションの制作、市内ギャラリーでの同時企画など、どれも初の試みができた。なかでも関連イベントとして企画した落語会は思い出深い。「鉄拐」を初めて聴いた時の衝撃から落語会開催へ向けて動き出し、様々な問題を乗り越えて実現することができた。思いきってお願した人気落語家から出演の承諾を取りつけ、チケットの販売枚数を大きく上回る応募にもつながった。落語をきっかけに当館を初めて知る方も展覧会へ呼び込めたのではないかと思う。

市街地から中央総合公園へ入り、当館へと向かうアプローチは、まるで桃源郷のようだ。と志らく師匠が語っていた。仕事に追われる日々で気がつかなかったが、桜や芝桜が桃色に染めた周辺も、もう二度と出合えない展覧会という意味でも、この場所がひととき桃源郷だったのかもしれない。と感じた瞬間だった。(澤田)

INFORMATION

くらしと戦争 - 昭和 戦争の記録 -

6月4日(土)～7月31日(日)

■ 学芸員による展示説明会

7月23日(土) ※午後2時から

名品コレクション100選 ピカソから村上隆まで

8月6日(土)～9月25日(日)

■ 講演会

8月28日(日) 「コレクションのこれまでとこれから」

荒井信貴(当館副館長・岡崎市美術館長)

※午後2時から

■ 学芸員による展示説明会

8月13日(土)、9月3日(土)、9月18日(日)

※いずれも午後2時から

■ 館外講座

8月11日(木) ※午後2時から

※会場は岡崎市美術館

展覧会予告

浄土へのいざない

- 三河浄土宗寺院の歴史と美術 - (仮称)

10月8日(土)～11月20日(日)

平安時代末期、末法の世に惑う人々を救うため、ひらすら念仏を唱えることで、すべての人がありのままに往生できるという専修念仏の教えを説き、浄土宗を開いた法然(1133～1212)。今年は法然上人の800回忌にあたります。

古来三河は浄土宗の盛んな地域であり、なかでも徳川將軍家の菩提寺である大樹寺を中心に発展した浄土宗(鎮西派)、末寺の大半が三河に集中し、三河十二本寺を中心に教線を拡大した浄土宗西山深草派は、その代表的な流派です。

本展では、大樹寺、信光明寺、法蔵寺、崇福寺など市内の名刹をはじめ、西尾、豊田など西三河の浄土宗寺院を中心に、その至宝の数々を一堂に展示し、浄土教美術の粋をご覧いただきます。また寺勢の盛衰に深く関係した松平氏・徳川氏など有力武士の帰依を示す資料を紹介し、浄土宗寺院をめぐる三河の歴史をたどりま。今年800年という大遠忌と巡り合った、その稀有な縁に導かれ、この機会に法然の説いた浄土の世界へと誘われてみてはいかがでしょうか。

美術博物館の裏側

社会人として新生活を始めた今年の四月、配属されたのは美術博物館だった。今までは趣味で美術館・博物館に足を運ぶだけの立場であったのが一転、その裏側を知ることとなった。

一番の発見は、一つの展覧会の開催に多くの人々が関わっているという点である。まだ全てを把握しているわけではないが、学芸員や出品作品所蔵者の方々はもちろん、作品運搬や会場設営を担う業者の方々、チラシ・ポスターを製作する印刷会社の方や広報媒体である新聞社・雑誌社の方など、来館者の目に見える部分だけでもこれだけの人々が関わっている。さらに展示室から見えない部分では、空調・照明をはじめとした施設の管理や、各種事務などが行われている。

今まで、展覧会にこれほど多くの人々が関わっているという認識はなかった。よく考えればわかることだが、学生時代は、学芸員の仕事にばかりに注目がちであった。勉強不足を反省するばかりである。

ここで触れたのはほんの一部であるが、作品を堪能した後、美術博物館の裏側を想像していただくと、展覧会のまた違った一面が見えてくるかもしれない。(酒)

おしゃべり、あれこれ。

万年筆の温かさ

私的プチ文化情報

ここ数年、文字を書くのは万年筆と決めている。パソコンで打たれた文面は、顔の見えない現代社会の現れのように好きではないからである。

短文ならば依頼原稿から展覧会への出品依頼状まで、万年筆でしたためると先方からも温かな反応が返ってくるように感じる。手で書くというひと手間の気持ち、相手に通じるからではないか。

愛用の万年筆はドイツ、ペリカンのM800デモンストラターという内部のインク吸入機構が見える特別生産モデル(二〇〇八年)。その透明軸に仕込まれたシンプルで美しい機械仕掛けを眺めているだけでも楽しい。この万年筆は限定生産のため、今では入手も容易ではないが、昨年岡崎市内の万年堂という専門店で見つけて購入した。このお店は、私が物心ついた頃から変わらぬ構えのままそこに在って、以前から気になっていた。聞けば戦後から半世紀以上にもわたってご夫妻で切り盛りされてきたという老舗であった。

最近では、昭和の空気をそのままに留めた店内で、ご夫婦の穏やかな笑顔に会うのが私の楽しみのひとつとなった。お二人と談笑していると、万年筆には人間らしい温かな魅力が填まっているのだと、あらためて思われるのである。(村)

編集後記 | 桃源郷展も終わり、しばらくは収蔵品をメインにした展覧会が続きます。今月いっぱい開催中の「くらしと戦争」展は、展示スペースが狭いながらも見応えがあり、ちょうど朝の連続テレビ小説「おひさま」と重なって、胸と目頭が熱くなります。次回のコレクション100選は、初めてご紹介する作品もあり、常設展示室のない当館としては、この機会を是非、見逃して欲しくないとの思いでいます。さて、館長が榊原悟さんに替わり、いよいよ新しい体制が始まります。どのようになっていくのか。どうぞご期待下さい。(千葉)

表紙図版：北川民次《メキシコ風景(トラルパムへの道)》1926年



開館時間 午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第49号 2011年7月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA